

前山君のこと

都甲 幸治

孔雀の話を覚えている。前山君は学部までは理系で、卒論は孔雀の交尾行動について書いたそう。けれどフィールドに出て観察していると、いざというときに茂みに入ってしまう見えなくなる。それを追いかけていくのだが、孔雀の動きは素早くてすぐに見失ってしまう。「孔雀もやっぱり、そういうのは恥ずかしいのかなあ」と前山君は関西弁でのんびりと言う。そのいい方がなんだかおかしかった。太っていて丸顔の彼が少し高めの声で言うと、逃げ回る孔雀たちと、逃がしてなるまいと追いかける彼の姿が目には浮かんでくる。僕はその光景を想像して楽しんだ。

そのころ、僕はどこにも行き場がなかった。博士課程の試験に落ちてしまい、しゃくだから研究生にもならなかった。というか、大学そのものに絶望していた。当時ブコウスキーの翻訳書を一冊出ただけの僕は、これからは自分でやっていくんだと意気込んでいたが、大して仕事ができるわけでもない。出版社を回っても、ただ雑談をして帰ってくるだけだ。翻訳をして、図書館で借りた本を読み、近所を走ると一日のやる事がなくなってしまふ。家族以外と会わないと暗い気持ちになってくる。だいたい、両親からは人生どうするつもりだと問い詰められる。だから半ば強引に、柴田先生に頼んで大学院ゼミに出させてもらっていた。ゼミの後輩たちにしたらいい迷惑だったろう。年齢も所属も不明な先輩が、理由なくイラついて突っかかってくるのだから。でも、柴田先生はどうしようもない僕を受け入れてくれた。生きることすら困難な僕にとって、唯一の居場所が柴田ゼミだった。

それは他のゼミ生にしても同じだったかもしれない。みんな、自分がやりたいことが何かもわからず、何ができるかなんて見当もつかなかった。小説家になる前の小野正嗣君は、野球好きの青年として顔を出していた。当時彼はフーコーの研究をしていて、小説も以前から書きためていた。「でも小説家になれるなんて思っていないですよ」と小野君は弱気に笑う。いっぽう、前山君は読書が好きで、日本語と英語で大量の本を読んではいたけれど、論文を書くのは大嫌いだった。たぶん、論文という形では自分の思いは書けないということだったんじゃないかと思う。結局論文ともエッセイともつかないものを修士論文として提出して、英文科の博士課程に上がったはずだ。

いずれにせよ、あんまり大学には適性がない感じの学生たちが集まって、文学についての思いをぶつけ合っていた。ゼミの時間は楽しかった。前山君と僕とでアイディアのパスを回しながら、他のやつらの意見も入ってきて、それを柴田先生がうまく交通整理する。将来の見通しは全然ないけれど、作品と向かい合っているときは日々の辛さも忘れられた。大学に適性がないというのは、柴田先生も同じだったんじゃないかと思う。今度こそは辞めてやる、というのが口癖だった。全然辞めなかったけど。もし昇進、じゃなくて、降格してもらえたらそっちのほうがいいとも言っていた。作家は肩書きが短いけど、大学の先生は肩書きがやたらと長くて恥ずかしいという言葉も覚えている。僕はそういう柴田先生をカッコいいと思った。自分は正しい場所にいると感じた。

ゼミのあとは、よく前山君と散歩した。本郷から、湯島を通って秋葉原まで歩く。僕はそこそこ金がないから、中古の安い部品や基盤を買ってはコンピュータを組み立てていた。ジャンク屋でいろいろと漁っていると、鬼気せまる表情をしていたのだろうか、前山君に「都甲さん、怖い」と言われたのを覚えている。もちろん本の話もした。前山君は神田の東京堂にある洋書売り場が好きだった。マニアックな店員がいて、東欧文学の英語版などが大量においてあったのだ。それだけではない。ハシエクから見田宗介まで、前山君は実によく読んでいた。いろいろと薦めてもらったけど、まだ読んでいないものも多い。でも彼と話していたら、本当に本が好きなんだなあという気持ちが伝わってきた。

結局僕は、フリーで三年間がんばったあげく、不安定な身分に耐えきれず大学院に舞い戻った。大学で文学をやることの意味なんて信じていないのに、信じているふりをして、自分にも周囲にも嘘をついて、最短の時間で大学教員になろうと決意した。言いたいことは職を取ってからでいい。それまで、思ったことは決して言うまい、何があっても決して誰とも喧嘩するまい。一度大学にいられなくなった僕は、いつも自分にそう言い聞かせていた。それは、結果的には正しかったと思う。それまで、自分の勝手な思いしかなかった僕は、周囲の意見を聞くようになったし、我慢も覚えた。つまりは大人になったってことだ。こういう陳腐な言い方で尽くせるのは、僕もまた平凡な人間でしかなかったからである。どうやれば周囲に認めてもらえるかも覚えた。それが嬉しかった。でも悲しかった。節を曲げた自分に失望した。

前山君は違った。論文も書かず、博士課程を辞めてしまい、フリーターになっていた。いや、そうじゃないか。アストロ・テラーの『エドガー@サイプラス』という小説を訳し、続いてリチャード・パワーズの『囚人のジレンマ』に取り組んでいた。僕は途中で挫折してしまったけど、彼は着々と、大学に属せずに文学を続ける人生を築きつつあった。僕にはその生き方は筋が通ったものに思えた。それでも、僕は僕のやり方を貫くしかない。とにかく、ひたすら妥協し続けること。論文を書き、学会に顔を出し、アメリカ留学を決め

た。2001年から数年ロサンゼルスで過ごした。その間、前山君は夜通しテレフォンアポインターの仕事をこなしながら翻訳をし、たまに柴田先生の家でコンピュータの整備をしていた。それまでは僕がやっていた役目だ。

日本に戻ってきたあと、僕は大学の先生になった。2005年のはじめだったかな。前山君と僕が蒲田にある柴田先生のお宅へ行き、久しぶりコンピュータの整備をすることになった。無線LANの調整をしたり、うまく動かないプリンタの代わりに川崎のヨドバシカメラまでわざわざ買いに行ったりした。一日一緒にいたので、前山君と色々な話をした。

作業が終わり、雑色駅に近い焼鳥屋でみんなで飲んだ。柴田先生も機嫌がよくて、大いに語り大いに飲んだ。先生はすごく嬉しそうだった。「またこの三人で集まろう」と柴田先生が言っていたのを覚えている。結局は、もう集まることはなかったけど。帰りの電車で僕は、大学での仕事の話をした。「大学院に行くべき優秀な学生をとって、いいゼミにしていくつもりだ」と言うと、前山君はこう答えた。「大学院に行くべきやつなんていないですよ」。彼がそのとき、それをどういう意味で言ったのかはわからない。でも、僕は自分が恥ずかしくなった。たぶん売れない時代から一転して人生がうまくいった気がして、傲慢になっていたんだと思う。自分は他の教師とは違うから、自分さえがんばればいい学校になるだろう、という考えは驕りでしかない。あくまで主人公は学生であり、教師は彼等の成長を見守るだけだ。でも当時の僕には何も見えていなかった。

それから一カ月ほど経ったころだろうか。佐々木一彦君から、携帯に電話があった。僕は日頃めったに携帯には出ないんだけど、そのときはなぜかすぐに電話を取った。「前山さんが亡くなりました」本当かよ。こないだまで一緒に飲んでいたんだぜ。聞けば、家から揚げを食べようとしてテーブルに並べ、さあというところで脳内の血管が切れたという。ほぼ即死だったらしい。どうしていいかわからなくて、僕は自分を責めた。もっとこっそりしたものを食べるなど言えばよかった。もっと運動して痩せろと言えばよかった。もちろん今では、こんなのはただのたわごとだとわかる。言ったってやるかどうかは彼次第なんだし。でもそのときは本気だった。嘘であってほしいと思った。でも、葬式で彼の顔を見たとき、本当だと認めざるを得なくなった。その夜、佐々木君と飲みながら僕はあらゆるものに怒り続けた。前山君に対してもだ。佐々木君に、そういうことを言うのはやめてくれと言われたのを覚えている。佐々木君ごめんな。

しばらくして、前山君の遺品をみんなで分けた。下宿にあった膨大な本をもらってほしい、と前山君のお母さんが言ってくれたのだ。柴田先生の研究室に本は積み重ねられていた。僕が必死に選んでいると、横で先生が泣いていた。箱に詰めて、門の前にある郵便局までカートに載せて二人で運んでいった。もし自分が先生の立場だったら、学生と一緒に

カートを押せただろうか。僕が柴田先生で好きなのはそういうところだ。

本はいまだに僕の大学の研究室にある。授業の教材として使ったものも多い。なんだか、あの日から10年間、前山君とずっと一緒に授業をしているような気がする。学生に思いを語り、ともに泣き、笑う。そこにはいつも彼がいる。だから中途半端なことなんてできない。だって、自分で気づいているかどうかにかかわらず、人のやることはどれも命懸けなんだから。前山君はそのことを教えてくれた。結局、途中までしかできなかったパワーズの本は、柴田先生が引き継いで完成させた。なんだか、前山君の思いがちゃんと遂げられたような気がしてほっとした。

太っている前山君のお腹に軽くパンチを入れるのが好きだった。会うたびにそうしていたような気がする。前山君は「ククク」と高い音を出して笑う。今でも彼の笑顔が目に浮かぶ。そんなときは、気づけば僕も一緒に笑っていた。